

月の下

中牟田 政也

神社の色は赤に決まっている。
神頼みは、明るい・華やかな所をしたい。
しかし、ここはそうではない。
暗い緑と暗い茶色。
気を晴らすことさえしてくれない。
「俺は何をしているのか？」
ここで足を止めた理由は、これに尽きる。
かといって、何をしたいのかもわからない。

中を覗いてみる。
広くは無い。奥まで様子がわかる。
時計で時刻を確認する。
今の自分もわからない者に、後の予定などあるものか。
自嘲する。

鳥居をくぐり、手水舎で手を洗う。
カツン。
銀色の柄杓は、硬い音を立てる。
くたびれた白いタオルが掛かっている。
昔からそうだが、何故か使いたくない。
柄杓の銘とタオルの刺繍が、同じ名前だ。
地元の商店だろう。
ズボンで雑に拭って本殿に向かう。

参道の中程、両脇に、石碑が立つ。
風化は進んでおらず、塗料も新しい。
手触りは滑らかで、冷たい。
右手で文字をなぞってみる。
溝は深く、綺麗に彫られている。
縁に積まれた小銭は賽銭だろう。
こちら側には「月在天上」、
反対側には「地在月下」とある。
こういうものは、大抵は対句だ。

今風に言いなおすと、さしずめ

お月さま 空の上
この星は 月の下

ごく平凡な、真実だ。
どちらか一つだけでは成立しない。
お互いの存在が必要、ということか？

境内は清掃が行き届いている。
落葉は綺麗に纏められている。
手水舎の金属に錆は無く、水も綺麗だ。

新たに得たものは、何も無い。
ここは全てが並以下で、安っぽい。
しかし、悔しいが、俺よりもずっと輝いている。
自分以外の人と、絶えず関わっているからだ。

予定も無いのに、時計を確認する。

その仕草は、傷を舐める猫の姿に似ていた。